

## 熊の彼氏

岐阜高校 2年 市川 竜太郎

私が森の熊と付き合い始めてから、もう三か月がたつ。目の前には、私が川でとってきた鮭にブルーベリーを盛りつけた料理が並べられたテーブルの向かいに、その熊がよだれを垂らして椅子にもたれかかるように座っている。木製のフォークとナイフを一応彼の皿の横にいつも並べているが、結局、彼は豪快に手だけを使って私の作った料理を口に流し込む。その姿は、なんとも野性的でかっこいい。今日も、この姿を見るためだけに、近くの川で一時間ほど釣りをして、どうにか鮭を捕まえてきた。彼氏は、そろそろ食べてもいいかと聞くように、その透き通るほどに美しい大きな目で私の顔を覗いている。私がウインクすると、彼は口を大きく開け、高く豪快に振り上げた右手が鮭へと向かっていった。テーブルが揺れて、鮭がぶると揺れた。

彼と出会ったのは、私が東京の喧騒から抜け出し、この森の中に引っ越してきて二日目の昼だった。リビングで東京から持ってきた大量の荷物の片づけに追われていたとき、玄関からドアを勢いよくたたく音が聞こえた。家全体が真横に揺れるほど強くドアをたたくものだから、誰か助けを求めているのではないかと思ひ、急いでそこへ向かい、ドアを勢いよく開けた。すると、そこには、熊がいた。そう、熊。茶色の長い毛を全身に纏って、足を大きく開いて立つ熊。あまりに堂々と、何の変哲もなくそこに立っていた。

もし、私が、東京に住んでいた時なら、もう喉が取れてしまうまで叫んでしまうだろうが、ここが森の中だったからだろう、その奇怪な状況をすつと受け入れることができた。

「どちら様ですか？」

玄関に左足だけを残して、声をかけた。すると、熊は、その質問を気にする様子もなく、右手からいくらか潰れたブルーベリーを取り出して、私の目を見ながら大きな舌を出して、口を大きく横に開いた。私は、そのブルーベリーを右手で受け取って、私も熊と同じ表情をした。熊は、鼻から彼の巨体の中にあらゆる空気を放出した。私も同じことをして、

「ありがとう」

と言った。熊は、なんだか心地悪そうにして、その場を去っていった。私はそんな彼をカッコいいと思った。

その次の日からも毎日、私の家に来ては、いろいろなプレゼントを渡してくれた。例えば、大量のどんぐりやダンゴムシ、爪痕が生々しく残った名前の知らない大魚、森の中に落ちていたと思われる鹿の角など、とりあえず森の中で拾ってきてくれたあたりからゆるものをプレゼントしてくれた。最初のうちは、どうもそれが照れくさかったらしく、プレゼントをあげるとすぐに自分の巣へ戻っていったが、日がたつにつれて徐々に

慣れてきたらしく、二人で無言の時間を楽しむようになった。ある時は、持ってきたどんぐりでキャッチボールをしたり、ある時には、一緒に火おこしをして、そこで取ってきた大魚と一緒に焼いて食べた。彼は、どうもその焼き魚が好みではなかったらしく、その時は口に入れたとたんに顔をしかめていた。その夜、熊と燃え立つ炎を囲むようにしながら大魚を食べているとき、私は

「好きです」

と言って熊を抱きしめた。熊は私を強く抱き返した。

熊は、今も私の前にいる。東京の満員電車で揺られていた頃が遠い過去の出来事のように感じる。熊は、どうやらもうすでに鮭をブルーベリーと一緒に飲み込んでしまったようで、腹を抱えてふんぞり返っている。ああ、このまま寝るのかもしれないと思い、私は近くのソファから毛布を取ってきて、彼に渡す。熊は、眠そうな目を私に向けて、鼻からすべての息を出した。無言の時間が流れている。森のさえずりとともに、彼のいびきが家に木霊するのを感じた。森がそれにつられて揺れている。

次の日の朝、私が二階のベッドから目を覚ました時、森がまだ揺れていた。ああ、まだ彼も寝ているのかと思って、安堵した。しかし、私が、一階へ下ると、そこにいるはずの巨体がいなかった。散歩に行つて、外で寝ているだけかもしれないと思い、外へ行ってみるも彼の姿はなかった。そのうちに、森の揺れはいつの間にか止まり、私は、なんだか不安な思いがして、とりあえず行き先も決めず走り出した。森がもう一度揺れることを願って走った。どれぐらい走ったろうか、そこには、森の木漏れ日が、きれいに影と光の列をなして光る空間があった。その真ん中で、茶色の巨体が丸まっていびきをかいていた。私はなんだかほっとして、彼に駆け寄ろうとしたその時である。

「止まってください！」

と、複数人の男性の叫び声が森の中に響き、真横からは、熊の巨体に負けないほどの男二人が出てきて、私を挟み撃ちにするように制止させた。東京の満員電車の中で感じた窮屈な感覚を不意に思い出した。私は、なにが起きているかわからなかったけど、ただ、私は再度悪い予感を抱いて、その男達を振り切ろうとし、言葉にならない言葉を叫んで、泣いていた。どうか、二人の巨体の隙間からそこを抜けようとしたとき、右の方から森を割るような銃声が聞こえた。森が一瞬大きく揺れる。直感的に、私の彼氏が殺されたことを理解した。私は、喉が取れるまで叫んだ。森がもっと大きく揺れる。右のほうにオレンジの帽子を被ったハンターらしき男が見えた。二人の男は、私を不気味そうな目で見下ろしている。

とりあえず、この二匹のヒトを殺してやろうと思った。